

小原元 年譜

雑誌名	日本文学誌要
巻	23
ページ	97-99
発行年	1980-02-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019272

小原元先生略年譜

一九一九年 二月一日 南朝鮮鬱陵^{ウルリョン}島に生れる。父、小原政照（小学校校長）。母、さき、四人兄弟の次男。

一九二五年 四月 樺太庁 藻白帆尋常小学校入学。

一九三一年 三月 樺太庁 藻白帆尋常小学校卒業。四月 樺太庁 真岡中学校入学。五月頃家族樺太から引揚げる。東京府立第七中学校に転入学。

一九三六年 三月 東京府立第七中学校卒業。一年間自宅で闘病生活。

一九三七年 四月 法政大学高等商業部入学。

一九四〇年 三月 法政大学高等商業部卒業。四月 法政大学文学部文芸学科入学。国文学を専攻。

一九四二年 九月 戦争激化により、同大学を繰り上げ卒業。卒業論文「西鶴論」。法政大学国文学研究室の助手として後進の指導にあたる。第一書房に入社。四月「父ありき——小津安二郎作品」（法政大学新聞一五二号）。五月「二葉亭四迷論稿」（静思）

一九四三年 四月 東京府立第十五中学校教諭となる。七月「江戸文芸と女性」（『日本の女性文化』近藤忠義編・堀書店）

一九四四年 十一月頃「法政大学新聞」の編集をブレンとして応援していた関係で、憲兵隊に検挙される。牢獄ではB29から落下傘で降下した米兵捕虜と同じ房であった。のちこの米兵が憲兵によって背中から日本刀で斬殺されるのを目撃。空襲の混乱時の出来事であった。

一九四五年 七月頃出獄。八月 三笠書房入社。十二月 新日本文学会創立と同時に会員となる。「文学時標」の発行責任者となる。

一九四六年 一月 山中知恵子と結婚。六月 日本文学協会創立大会に参加。四月 「芥川龍之介『蜜柑』の鑑賞」（解釈と鑑賞）。

七月 「古典芸術の科学的鑑賞」（幽玄・なおこの年「文学時標」第二・五・六・八・九・十・十一・十二・十三の各号に執筆）

一九四七年 二月 「島崎藤村——『家』をめぐる」（文学）。二月 「小林秀雄氏へ」——無常にひそむ自我」（公開状「若き世代の立場から」真善美社）。三月 「虹（ウシレーフカヤ）について」（法政大学新聞一八四号）。六月 「わが文学的抱負——個性消滅」（新日本文学）。七月 「蔵原理論から」（学生評論）。八月 「文学反動の政治的傾向」（新日本文学）。九月 「西鶴置土産論」（文学）。

一九四八年 四月 法政大学高等師範部講師となる。一月 「斜陽の挽歌——解体に瀕する太宰治」（新日本文学）。「蟹工船」——価値評価の問題」（文学前衛）。九月 「文学反動の台頭」（民主主義文学運動）（新日本文学会）。十月 「批評の情熱」（雄山閣）。十一月 「小林多喜二論——その革命的人間の形成」（『プロレタリア文学再検討』雄山閣）。十二月 「町人文芸の再検討」（文学）。

一九四九年 一月 「はたらく婦人の恋愛」（新聲）。二月 「屋根裏部屋の危機——『近代文学』批判」（知性）。五月 「西鶴論の問題——その方法についての考察」（文学）。十一月 「主体性喪失への再省——変換期インテリゲンチヤの問題」（法政大学新聞二二三号）。十二月 「井原西鶴・研究手引」（日本文学）。

一九五〇年 一月 長女菁子誕生。一月 「我執の文学——その方向平林たい子問題」（新日本文学）。「可能性への肉薄」（東京大学新聞一月二十六日号）。四月 「日本近代文学史」（新日本文学会編「入門文学講座」四巻 富士出版社）。十二月 「プロレタリア文学運動」（改造社「昭和文学十二講」）。

一九五一年 三月 新日本文学会第六回大会で中央委員に選出され

る。四月 法政大学文学部助手となる。六月 「多喜二・百合子研究会」発足と同時に参加。七月 埼玉県久喜の農村青年たちとの交流始る(後、麦秋の会に発展)。三月「最近の感動」(法政文芸)。五月 「『道標』評価の論点——社会主義リアリズムの道」(法政大学新聞三二一号)。六月 「民族的典型への文学——『道標』のめざすもの」(文学)。七月 「より意欲的に——民芸時評」(民芸通信六号)。

一九五二年 三月「叙事詩か現実か」(新日本文学)。四月 「北村透谷」(現代文学総説I 学燈社)。六月 「プロレタリア文学運動」(荒正人編『昭和文学研究』塙書房)。六月 「危機に生きる文学」(文学芸術)。七月 「私小説的世界の崩壊」(新日本文学)。九月 「小説のリアリティについて」(新日本文学)。

一九五三年 五月 「文学的『左翼』空論主義について」(新日本文学)。

九月 「『生活の探求』について」(近代文学)。十二月 「『蟹工船』——群衆の個性の問題」(文学研究)。

一九五四年 四月 法政大学文学部専任講師となる。二月 「農民文学における変革の視点」(多喜二と百合子)。五月 「書評『日本文学の古典』——古典文学への手引」(法政)。十一月 「文学鑑賞の手引・樋口一葉『にぎりえ』」(麦秋)。

一九五五年 一月 新日本文学会第七回大会で幹事に選出される。

四月 法政大学文学部助教となる。二月 「プロレタリア小説・概説」(日本文学協会編『日本の小説II』東大出版会)。四月 「文学鑑賞の手引——田山花袋著『田舎教師』」(麦秋)。

一九五六年 一月 「善意を信じ合うこと」(法政大学新聞三〇七号)。四月 「『不在地主』と『防雪林』——そのリアリズム」(文学)。四月 「書評『ぼくらは無罪だ』」(法政)。六月 「林芙美子論——『放浪記』の抒情性について」(日本文学)。十月 「文学鑑賞の手引——長塚節著『土』」(麦秋)。十一月 「そとぼりの青春に・その五」(暁

に寄する歌」(法政大学新聞三二七号)。十二月 「座談会 時流をこえて——乾孝、青木宗也、日高普、増島宏、森田茂介、小原元」(法政)。

一九五七年 十一月「リアリズム研究会」発足、会員となる。五月 「座談会・転換期に立つ法政野球部——小原元、鶴沢七郎、日高普」(法政)。十一月 「『沖繩島』論」(新日本文学)。十二月 「とりとめのない回想」(日本文学誌要復刊一号)。

一九五八年 四月 「変革思想と文学方法・『小林多喜二』・『断層地帯』を中心に」(法政大学新聞三六六号)。六月 「現代的意味を広く考察した上で」(法政大学新聞三七一号)。十月 「新しいリアリズムへの期待」(リアリズム創刊号)。十一月 「文芸コンクール創作短評——社会的視野を広げよ」(法政大学新聞三八二号)。

一九五九年 七月 「私の東京」(法政)。八月 「独立と連帯の新しい芽——戦後世代の『親』『家』観における——」(法政)。八月 「プロレタリア文学の影響——課題の正当なる継承と発展のために」(国文学)。十月 「さらに高い変革を——戦後文学を再検討する」(法政大学新聞四〇六号)。

一九六〇年 四月 農民文学研究会に参加。一月 「怒りの文学とは何か」(リアリズム三三号)。八月 「まことに理想的スコア」(法政)。

一九六一年 四月 「近藤忠義先生の風貌」(法政)。九月 「樋口一葉」(近代文学研究必携 学燈社)。十二月 「座談会・かいまみた別世界——アジア・アフリカ横顔——小田切秀雄、小原元」(日本文学誌要七号)。十二月 「農民文学の方法」(法政大学文学部紀要七号)。

一九六二年 四月 法政大学文学部教授となる。五月 「現実と文学の自律性」(現実と文学)。十二月 「中野重治における政治と文学」(現実と文学)。十二月 「江戸戯作者の精神的位相」(近藤忠義教授還暦記念論文集『日本文学古典新論』河出書房新社)。

一九六三年 十二月 日ソ交換教授として、モスクワに出発、モスクワ大学の東洋語大学という部門の日本語科で講義を行なう。

二月 「座談会・現実変革の思想と方法」(現実と文学)。十月「文学的方法における民族の発見」(現実と文学)。

一九六四年 七月 モスクワを立ち、帰国。十月 「ソヴィエト——若さを楽しむ学生たち」(法政)。

一九六五年 八月 民主主義文学同盟、結成に加わる。常任幹事に選出される。九月久我山病院に入院。病名は肺結核。三月

「座談会・ソビエトの学生たち——小原教授をかこんで——近藤忠義、表章、伊藤敬一」(日本文学誌要)。四月「『黙秘』への疑念」(文化評論)。六月 「中野重治の戦後の姿勢」(現実と文学)。

一九六六年 五月 久我山病院を退院。九月 「『播州平野』と戦後民主主義文学の出發」(民主文学)。

一九六七年 三月 民主主義文学同盟第二回大会で常任幹事に再選される。一月 「日本の近代小説——その読み方と味わい方」(新興書房)。十二月 「中野重治『村の家』をめぐって」(法政大学文学部紀要十三号)。

一九六八年 四月 「『政治と文学論争』を中心に」(民主文学)。十一月「宮本百合子選集第二巻・解説」(九巻・十巻解説も担当、新日本出版社)。

一九六九年 三月 民主主義文学同盟第三回大会終了後、同盟を脱退。八月「現代文学研究会」発足、会員となる。十月 「私のスローガン」(現代と文学創刊準備号)。

一九七〇年 五月 「評論・記憶の誤りのこわさ——間宮茂輔・プロレタリア文学の回想について」(現代と文学)。

一九七一年 十一月 「平林たい子論」(『日本文学研究資料叢書』有精堂)。
一九七二年 八月 「日清・日露戦争の文学・樋口一葉『にぎりえ』」(解釈と鑑賞)。十一月 「谷崎潤一郎の初期の作品」(荒正人編『谷崎潤

一郎研究』八木書店)。

一九七三年 九月 「農民文学の系譜は反逆の生命力だった」(地上)。
一九七四年 久我山病院に入院(転移性肺癌)。

一九七五年 四月三十日 歿す。五月二日自宅にて告別式挙。八月「これははめすぎではありません」(三千里三号)。

一九七六年 五月二日 二時久喜市甘棠院において墓碑の除幕が行われる。同日三時半から同市ニュー八雲において「小原元を偲ぶ会」開催。なおこの日は恩師近藤忠義先生の告別式の日であった。

一九七七年 五月三十一日 『リアリズム文学への道——小原元文学論集』発行。六月一日 私学会館において小原元文学論集出版記念会開催。